

俊寛

芥川龍之介

青空文庫

俊寛しゅんかん云いけるは……神明外しんめいほかになし。唯我等ただが一念なり。……唯仏法しゆぎよを修しゆ行うして、今度生死こんどしやうしを出で給うべし。源平盛衰記げんぺいせいすいき

(俊寛) いとど思ひの深くなれば、かくぞ思いつづけける。「見せばやな我を思わぬ友もがな磯のとまやの柴しばの庵おりを。」同上

一

俊寛様の話ですか？ 俊寛様の話くらい、世間に間違つて伝えられた事は、まずほかにはありますまい。いや、俊寛様の話ばかりではありません。このわたし、——有王ありおう自身みづかみの事さえ、飛とんでもない嘘が伝わっているのです。現についてこの間も、ある琵琶法師びわほうしが語つたのを聞けば、俊寛様は御歎きの余り、岩に頭を打ちつけて、狂い死くるしにをなすってしまうし、わたしはその御死骸おなきがらを肩に、身を投げて死んでしまったなどと、云っているではありませんか？ またもう一人の琵琶法師は、俊寛様はあの島の女と、夫婦かたの談かたらいをなすつた上、子供も大勢御出来になり、都にいらした時よりも、楽しい生しやうがい涯がを御送りになつ

たとか、まことしやかに語っていました。前の琵琶法師の語った事が、跡方あとかたもない嘘だと云う事は、この有王が生きているのでも、おわかりになるかと思いますが、後の琵琶法師の語った事も、やはり好いい加減の出たらめなのです。

一体琵琶法師などと云うものは、どれもこれも我は顔われがに、嘘ばかりついているものなのです。が、その嘘のうまい事は、わたしでも褒めずにはいられません。わたしはあの笹ささの小屋に、俊寛様が子供たちと、御戯おたわむれになる所を聞けば、思わず微笑を浮べましたし、またあの浪音の高い月夜に、狂い死をなさる所を聞けば、つい涙さえ落しました。たとい嘘とは云うものの、ああ云う琵琶法師びわほうしの語った嘘は、きっと琥珀こはくの中の虫のように、末代までも伝わるでしょう。して見ればそう云う嘘があるだけ、わたしでも今の内ありのままに、俊寛様の事を御話しないと、琵琶法師の嘘はいつのまにか、ほんとうに変つてしまいかも知れない——と、こうあなたはおっしゃるのですか？ なるほどそれもごもつともです。ではちようど夜長を幸い、わたしがはるばる鬼界きかいが島しまへ、俊寛様を御尋ね申した、その時の事を御話しましょう。しかしわたしは琵琶法師のように、上手にはとても話されません。ただわたしの話の取り柄えは、この有王が目のあたりまに見た、飾りのない真実と云う事だけです。ではどうかしばらくの間あいだ、御退屈でも御聞き下さい。

二

わたしが鬼界が島に渡ったのは、治承三年五月の末、ある曇った午過ぎです。これは琵琶法師も語る事です、その日もかれこれ暮れかけた時分、わたしはやっと俊寛様に、めぐり遇う事が出来ました。しかもその場所は人気のない海べ、——ただ灰色の浪ばかりが、砂の上に寄せては倒れる、いかにも寂しい海べだったのです。

俊寛様のその時の御姿は、——そうです。世間に伝わっているのは、「童かと思れば年老いてその貌にあらず、法師かと思えばまた髪は空ぎまに生い上りて白髪多し。よろずの塵や藻屑のつきたれども打ち払わず。頸細くして腹大きに脹れ、色黒うして足手細し。人にして人に非ず。」と云うのですが、これも大抵は作り事です。殊に頸が細かったの、腹が脹れていたのと云うのは、地獄變の画からでも思いついたのでしょう。つまり鬼界が島と云う所から、餓鬼の形容を使つたのです。なるほどその時の俊寛様は、髪も延びて御出でになれば、色も日に焼けていらつしやいましたが、そのほかは昔に変わらない、——いや、変らないどころではありません。昔よりも一層丈夫そうな、頼もしい御姿だつ

たのです。それが静かな潮風に、法衣の裾を吹かせながら、浪打際を独り御出でになる、——見れば御手には何と云うのか、笹の枝に貫いた、小さい魚を下げていらつしやいました。

「僧都そうずの御房ごぼう！ よく御無事でいらつしやいました。わたしです！ 有王ありおうです！」

わたしは思わず駈け寄りながら、嬉しまぎれにこう叫びました。

「おお、有王か！」

俊寛様は驚いたように、わたしの顔を御覧になりました。が、もうわたしはその時には、御主人の膝を抱いたまま、嬉し泣きに泣いていたのです。

「よく来たな。有王！ おれはもう今生こんじょうでは、お前にも会えぬと思っていた。」

俊寛様もしばらくの間は、涙ぐんでいらつしやるようでしたが、やがてわたしを御抱き起しになると、

「泣くな。泣くな。せめては今日会つただけでも、仏菩薩ぶつぼさつの御慈悲ごじひと思うが好い。」と、親のように慰めて下さいました。

「はい、もう泣きは致しません。御房ごぼうは、——御房の御住居おすまいは、この界限かいがいでございますか？」

「住居か？ 住居はあの山の陰じや。」

俊寛様は魚を下げた御手に、間近い磯山を御指しになりました。

「住居と云つても、檜肌葺きではないぞ。」

「はい、それは承知して居ります。何しろこんな離れ島でございますから、——」

わたしはそう云いかけたなり、また涙に咽びそうになりました。すると御主人は昔のように、優しい微笑を御見せになりながら、

「しかし居心は悪くない住居じや。寝所もお前には不自由はさせぬ。では一しよに来て見るが好い。」と、気軽に案内をして下さいました。

しばらくの後わたしたちは、浪ばかり騒がしい海べから、寂しい漁村へはいました。薄白い路の左右には、梢から垂れた榕樹の枝に、肉の厚い葉が光っている、——その木の間に点々と、笹葺きの屋根を並べたのが、この島の土人の家なのです。が、そう云う家の中に、赤々と竈の火が見えたり、珍らしい人影が見えたりすると、とにかく村里へ来たと云う、懐しい気もちだけはして来ました。

御主人は時々振り返りながら、この家にいるのは琉球人だとか、あの檻には豕が飼つてあるとか、いろいろ教えて下さいました。しかしそれよりも嬉しかったのは、烏帽

子さえかぶらない土人の男女が、俊寛様の御姿を見ると、必ず頭を下げた事です。殊に一度などはある家の前に、鶏とりを追っていた女の児さえ、御時宜おしぎをしたではありませんか？わたしは勿論嬉しいと同時に、不思議にも思つたものですから、何か訳のある事かと、そつと御主人うかがに伺つて見ました。

「成経様なりつねや康頼様やすよりが、御話になつた所では、この島の土人も鬼おにのように、情なさけを知らぬ事かと存じましたが、——」

「なるほど、都にいるものには、そう思われるに相違あるまい。が、流人るにんとは云うもの、おれたちは皆都人みやこびとじや。辺土へんどの民はいつの世にも、都人と見れば頭を下げる。業平なりひらの朝臣あそん、実方さねかたの朝臣、——皆大同小異ではないか？ ああ云う都人もおれのように、東あづまや陸奥みちのくへ下つた事は、思ひのほか楽しい旅だつたかも知れぬ。」

「しかし実方の朝臣などは、御隠れになつた後のちでさえ、都恋しさの一念から、台盤所だいばんどころの雀すずめになつたと、云い伝えて居おるではありませんか？」

「そう云う噂うわさを立てたものは、お前と同じ都人じや。鬼界きがいが島しまの土人と云えば、鬼のように思う都人じや。して見ればこれも当てにはならぬ。」

その時また一人御主人に、頭を下げた女がいました。これはちやうど榕樹あこうの陰に、幼な

児を抱いていたのですが、その葉に後を遮られたせいか、紅染めの単衣を着た姿が、夕明りに浮んで見えたものです。すると御主人はこの女に、優しい会釈を返されてから、

「あれが少将の北の方じやぞ。」と、小声に教えて下さいました。わたしはさすがに驚きました。

「北の方と申しますと、——成経様はあの女と、夫婦になっていらしたのですか？」俊寛様は薄笑いと一しよに、ちよいと頷いて御見せになりました。

「抱いていた児も少将の胤じやよ。」

「なるほど、そう伺って見れば、こう云う辺土にも似合わない、美しい顔をして居りました。」

「何、美しい顔をしていた？　美しい顔とはどう云う顔じや？」

「まあ、眼の細い、頬のふくらんだ、鼻の余り高くない、おっとりした顔かと思いますが、

——

「それもやはり都の好みじや。この島ではまず眼の大きい、頬のどこかほっそりした、鼻も人よりは心もち高い、きりりした顔が尊まれる。そのために今の女なども、ここでは誰も美しいとは云わぬ。」

わたしは思わず笑い出しました。

「やはり土人の悲しさには、美しいと云う事を知らないのですね。そうするとこの島の土人たちは、都の上臈じょうろうを見せてやつても、皆醜みにくいと笑いますかしら？」

「いや、美しいと云う事は、この島の土人も知らぬではない。ただ好みが違っているのじや。しかし好みと云うものも、万代不変ばんたいふへんとは請合うけあわれぬ。その証拠には御寺御寺の、御仏ほとけの御姿みすがたを拝むが好い。三界六道さんがいりくどうの教主、十方最勝じつぱうさいしょう、光明無量こうみょうむりょう、三学無碍さんがくむげ、億億衆生おくおくしゅじよういんどう引導のうげの能化、南無大慈大悲釈迦牟尼如来なむだいじだいひしやかむににょらいも、三十二相八十種好そうしゆこうの御姿みすがたは、時代ごとにいろいろ御変りになった。御仏みほとけでももしそうとすれば、如何いかんかこれ美人と云う事も、時代ごとにやはり違う筈じや。都でもこの後五百年のちか、あるいはまた一千年か、とにかくその好みの変る時には、この島の土人の女どころか、南蛮北狄なんばんほくてきの女のように、凄まじい顔がはやるかも知れぬ。」

「まさかそんな事もありますまい。我国ぶりはいつの世にも、我国ぶりでいる筈ですから。」

「所がその我国ぶりも、時と場合では当てにならぬ。たとえば当世の上臈じょうろうの顔は、唐と朝うちようの御仏みほとけに活写いきうつしじや。これは都人みやこびとの顔の好みが、唐土もうこしになずんでいる証し」

抛ようごではないか？　すると人皇にんおう何代かの後のちには、碧眼へきがんの胡人えびすの女の顔にも、うつつをぬかす時がないとは云われぬ。」

わたしは自然とほほ笑えみしました。御主人は以前もこう云う風に、わたしたちへ御教訓なすつたのです。「変らぬのは御姿ばかりではない。御心もやはり昔のままだ。」——そう思うと何だかわたしの耳には、遠い都の鐘の声も、通かよつて来るような気がしました。が、御主人は榕樹あじうの陰に、ゆつくり御み足を運びながら、こんな事もまたおっしゃるのです。「有王。おれはこの島に渡つて以来、何が嬉しかったか知っているか？　それはあのやかしい女にようぼう房のやつに、毎日小言こごとを云われずとも、暮されるようになった事じやよ。」

三

その夜わたしは結ゆい燈台とうだいの光に、御主人の御飯を頂きました。本来ならばそんな事は、恐れ多い次第なのですが、御主人の仰おほせもありましたし、御給仕にはこの頃御召使いの、兎唇みつくちの童わらべも居りましたから、御招伴ごしょうばんに預あずかつた訳なのです。

御部屋は竹縁ちくえんをめぐらせた、僧庵そうあんとも云いたい拵こしらえです。縁先に垂れた簾すだれの外には、

前栽せんざいの竹たかむらがあるのですが、椿つばきの油を燃やした光も、さすがにそこまでは届きません。御部屋の中には皮籠かわごばかりか、廚子ずしもあれば机もある、——皮籠は都を御立ちの時から、御持ちになつていたのですが、廚子や机はこの島の土人が、不束ふつつかながらも御拵おこしらえ申した、琉球赤木りゅうきゆうあかぎとかの細工さいくだそうです。その廚子の上には経文きやうもんと一しよに、阿弥陀如来あみだにょらいの尊像が一体、端然と金色こんじきに輝いていました。これは確か康頼やすより様の、都返りの御形かたみだとか、伺つたように思っています。

俊寛しゆんかん様は円座わろうだの上に、楽々と御坐りなすつたまま、いろいろ御馳走ごちそうを下さいます。勿論この島の事ですから、酢すや醬油しょうゆは都ほど、味が好いよとは思われません。が、その御馳走の珍しい事は、汁なます、鱠なます、煮つけ、果物、——名さえ確かに知っているのは、ほとんど一つもなかったくらいです。御主人はわたしが呆れたように、箸はしもつけないのを御覧になると、上機嫌に御笑いなさりながら、こう御勧めおすすめ下さいました。

「どうじゃ、その汁の味は？ それはこの島の名産の、臭梧桐くさぎりと云う物じゃぞ。こちらの魚うおも食うて見るが好いよ。これも名産の永良部鰻えらぶうなぎじゃ。あの皿にある白地鳥しろちどり、——そうそう、あの焼き肉じゃ。——それも都などでは見た事もあるまい。白地鳥と云う物は、背の青い、腹の白い、形は鶴こうにそつくりの鳥じゃ。この島の土人はあの肉を食うと、湿気しつきを払

うとか称となえている。その芋いもも存外味は好よいぞ。名前か？ 名前は琉球芋りゅうきゅういもじゃ。梶かじお王うなどは飯の代りに、毎日その芋を食くうている。」

梶王と云うのはさつき申した、兎唇みつくちの童わらべの名前なのです。

「どれでも勝手に箸はしをつけてくれい。粥かゆばかり啜すすつていさえすれば、得脱とくだつするように考かんえるのは、沙門にあり勝ちの不量見ふりようけんじゃ。世尊せそんさえ成道じょうどうされる時には、牧牛ぼくぎゅうの女難陀婆羅むすめなんだばらの、乳糜にゅうびの供養くようを受けられたではないか？ もしあの時空腹のまま、畢波ひつ羅樹下ばらしゆかに坐まつていられたら、第六天の魔王波旬はしゆんは、三人の魔女などを遣つかすよりも、六牙象王くげのぞうおうの味増漬みそづけだの、天竜八部てんりゅうはちぶの粕漬かすづけだの、天竺てんじくの珍味ちんみを降ふらせたかも知らぬ。もつとも食足くいれば淫いんを思おもうのは、我々凡夫の慣ならいじゃから、乳糜を食くわれた世尊の前へ、三人の魔女を送おくつたのは、波旬あも天あつ晴見ばれ上げた才子さいしじゃ。が、魔王の浅間あさましさに、その乳糜けんを献けんじたものが、女人にょにんじやと云う事を忘れて居ゐつた。牧牛の女難陀婆羅、世尊に乳糜を献けんじ奉る、——世尊が無上の道へ入いられるには、雪山せつさん六年の苦行よりも、これが遥かに大事だつたのじゃ。『取彼乳糜如意かのにゅうびをとりいのごとくほうしよくし飽食しつかいじようじんす、悉皆しつがい淨尽じようじん。』——仏ぶつ本行經ほんぎようきよう七卷の中にも、あれほど難有ありがたい所は沢山あるまい。——『爾時そのとき菩薩ぼさつ食糜しよくし已訖すでにおわりて從座而起さよりしてたつ。安庠あんじよう漸々ぜんぜん向菩提樹ぼだいじゆにむかう。』どうじゃ。『安あんじ

ようにぜんぜんぼだいじゆにむかう
庠漸々向菩提樹。』女人を見、乳糜に飽かれた、端嚴微妙の世尊の御姿が、
目のあたりに拝まれるようではないか？」

俊寛様は楽しそうに、晩の御飯をおしまいになると、今度は涼しい竹縁の近くへ、円座を御移しになりながら、

「では空腹が直つたら、都の便りでも聞かせて貰おう。」とわたしの話を御促しになりました。

わたしは思わず眼を伏せました。兼ねて覚悟はしていたものの、いざ申し上げるとなつて見ると、今更のように心が怯れたのです。しかし御主人は無頓着に、芭蕉の葉の扇を御手にしたまま、もう一度御催促なさいました。

「どうじゃ、女房は相不変小言ばかり云つてゐるか？」

わたしはやむを得ず俯向いたなり、御留守の間に出来した、いろいろの大変を御話しました。御主人が御捕われなすつた後、御近習は皆逃げ去つた事、京極の御屋形や鹿ヶ谷の御山荘も、平家の侍に奪われた事、北の方は去年の冬、御隠れになつてしまつた事、若君も重い疱瘡のために、その跡を御追いなすつた事、今ではあなたの御家族の中でも、たった一人姫君だけが、奈良の伯母御前の御住居に、人目を忍んでいらつしやる

事、——そう云う御話をしている内に、わたしの眼にはいつのまにか、燈台の火影が曇つて来ました。軒先の簾、廚子の上の御仏、——それももうどうしたかわかりません。わたしはどうとう御話半ばに、その場へ泣き沈んでしまいました。御主人は始終黙然と、御耳を傾けていらしたようです。が、姫君の事を御聞きになると、突然さも御心配そうに、法衣の膝を御寄せになりました。

「姫はどうじゃ？ 伯母御前にはようなついているか？」

「はい。御睦しいように存じました。」

わたしは泣く泣く俊寛様へ、姫君の御消息をさし上げました。それはこの島へ渡るものには、門司や赤間が関を船出する時、やかましい詮議があるそうですから、髻に隠して来た御文なのです。御主人は早速燈台の光に、御消息をおひろげなさりながら、ところどころ小声に御読みになりました。

「……世の中かきくらしして晴るる心地なく侍り。……さても三人一つ島に流されけるに、……などや御身一人残り止まり給うらんと、……都には草のゆかりも枯れはてて、……当時は奈良の伯母御前の御許に侍り。……おろそかなるべき事にはあらねど、かすかなる住居推し量り給え。……さてもこの三とせまで、いかに御心強く、有とも無とも承わら

ざるらん。……とくとく御上り候え。恋しとも恋し。ゆかしともゆかし。……あなかしこ、あなかしこ。……」

俊寛様は御文を御置きになると、じつと腕組みをなすつたまま、大きい息をおつきになりました。

「姫はもう十二になった筈じやな。——おれも都には未練はないが、姫にだけは一目会いたい。」

わたしは御心中を思いやりながら、ただ涙ばかり拭っていました。

「しかし会えぬものならば、——泣くな。有王。いや、泣きたければ泣いても好い。しかしこの娑婆世界には、一々泣いては泣き尽せぬほど、悲しい事が沢山あるぞ。」

御主人は後の黒木の柱に、ゆつくり背中を御寄せになつてから、寂しそうに御微笑なさいました。

「女房も死ぬ。若も死ぬ。姫には一生会えぬかも知れぬ。屋形や山荘もおれの物ではない。おれは独り離れ島に老の来るのを待っている。——これがおれの今のさまじや。がこの苦難を受けているのは、何もおれ一人に限った事ではない。おれ一人衆苦の大海に、没在していると考えるのは、仏弟子にも似合わぬ増長慢じや。『増長驕慢、

尚な非お世せ俗ぞく白はく衣い所しよ宜い。』艱かん難なんの多いのに誇る心も、やはり邪じゃ業ごうには違ちがいあ

るまい。その心さえ除のいてしまえば、この粟ぞく散さん辺へん土どの中うちにも、おれほどの苦くるを受けてい

るものは、恒ごう河が沙しゃの数かずより多いかも知れぬ。いや、人にん界がいに生なれ出でたものは、たといこ

の島しまに流ながされずとも、皆みなおれと同じように、孤こ独どくの歎たんを洩もらしているのじや。村むら上かみの御み

門かど第七しちの王わう子し、二に品ひん中なかつ務か親しん王のう、六ろく代だいの後こう胤いん、仁にん和なじ寺じの法ほう印いん寛かん雅がが子が、京きやう極ごくの

源みなもと大のだい納な言い雅ごん俊まさ俊とし卿きやうの孫まごに生なれたのは、こう云いう俊しゆん寛かん一いつ人にんじやが、天あめが下したには

千せんの俊しゆん寛かん、万まんの俊しゆん寛かん、十じゆ万ばんの俊しゆん寛かん、百ひやく億いの俊しゆん寛かんが流ながされているぞ。――」

俊寛様はこうおっしゃると、たちまちまた御眼おんめのどこかに、陽気みけしきな御氣色ひらめが閃ひらきました。

「一条二条の大路おおじの辻つじに、盲人めくらが一人さまようているのは、世あにも憐あわれに見えるかも知れ

ぬ。が、広い洛らく中ちゆう洛らく外がい、無量無数の盲人めくらどもに、充みち満みちた所ところを眺のぞめたら、――有ありお

王わう。お前はとうすると思う？ おれならばまっ先にふき出してしまふぞ。おれの島流しまし

も同じ事じじや。十方じつぽうに遍へん満まんした俊寛どもが、皆ただ一人流ながされたように、泣なきつ喚わめき

つしていると思おもえば、涙なみだの中うちにも笑わらわずにはいられぬ。有王いうわう。三さん界がい一いつ心しんと知しつた上うへは、

何なんよりもまず笑わらう事ことを学まなべ。笑わらう事ことを学まなぶためには、まず増長慢そうちやうまんを捨てねばならぬ。世尊せそん

の御出世ごしゆつせいは我々衆生しゆじやうに、笑わらう事ことを教しえに來きられたのじや。大般涅槃だいぱんねはんの御時おんどきにさ

え、摩訶伽葉は笑ったではないか？」

その時はわたしもいつのまにか、頬ほおの上に涙が乾いていました。すると御主人は簾すだれ越しに、遠い星空を御覧になりながら、

「お前が都へ帰ったら、姫にも歎きをするよりは、笑う事を学べと云ってくれい。」と、何事もないようにおっしゃるのです。

「わたしは都へは帰りません。」

もう一度わたしの眼の中には、新たに涙が浮んで来ました。今度はそう云う御言葉を、御恨おうちみに思った涙なのです。

「わたしは都にいた時の通り、御側おそば勤めをするつもりです。年とった一人の母さえ捨て、兄弟にも仔細しさいは話さずに、はるばるこの島へ渡つて来たのは、そのためばかりではありませんか？ わたしはそうおっしゃられるほど、命が惜いように見えるでしょうか？ わたしはそれほど恩義を知らぬ、人非にんび人のように見えるでしょうか？ わたしはそれほど、

「それほど愚かとは思わなかった。」

御主人はまた前のように、にこにこ御笑いになりました。

「お前がこの島に止ま^{とど}つていれば、姫の安否^{あんぴ}を知らせるのは、誰がほかに勤めるのじや？ おれは一人でも不自由はせぬ。まして梶王^{かじおう}と云う童^{わらべ}がいる。——と云つてもまさか妬^{ねた}みなぞはすまいな？ あれは便りのないみなし児じや。幼い島流しの俊寛じや。お前は便船^{びせん}のあり次第、早速^{さつそく}都へ歸るが好い^よ。その代り今夜は姫への土産^{みやげ}に、おれの島住いがどんなだったか、それをお前に話して聞かそう。またお前は泣いているな？ よしよし、ではやはり泣きながら、おれの話を書いてくれい。おれは独り笑いながら、勝手に話を続けるだけじや。」

俊寛様は悠々と、芭蕉扇^{ばしやうせん}を御使いなさりながら、島住居^{しまずまい}の御話をなさり始めました。軒先^{のきさき}に垂れた簾^{すだれ}の上には、ともし火の光を尋ねて来たのでしよう、かすかに虫の這^はう音が聞えています。わたしは頭を垂れたまま、じつと御話に伺い入りました。

四

「おれがこの島へ流されたのは、治承^{じしやう}元年七月の始じや。おれは一度も成親^{なりちか}の卿^{きやう}と、天下なぞを計つた覚えはない。それが西八条^{にしはちじやう}へ籠^こめられた後^{のち}、いきなり、この島へ流

されたのじやから、始はおれも忌々しさの余り、飯を食う気さえ起らなかった。」

「しかし都の噂では、——」

わたしは御言葉を遮りました。

「僧都の御房も宗人の一人に、おなりになったとか云う事ですが、——」

「それはそう思うに違いない。成親の卿さえ宗人の一人に、おれを数えていたそうじやから、——しかしおれは宗人ではない。浄海入道の天下が好いか、成親の卿の天下が好いか、それさえおれにはわからぬほどじや。事によると成親の卿は、浄海入道よりひがんでいるだけ、天下の政治には不向きかも知れぬ。おれはただ平家の天下は、ないに若かぬと云つただけじや。源平藤橘、どの天下も結局あるのではないに若かぬ。この島の土人を見るが好い。平家の代でも源氏の代でも、同じように芋を食うては、同じように子を生んでいる。天下の役人は役人がいぬと、天下も亡ぶように思っているが、それは役人のうぬ惚れだけじや。」

「が僧都の御房の天下になれば、何御不足にもありますまい。」

俊寛様の御眼の中には、わたしの微笑が映つたように、やはり御微笑が浮びました。「成親の卿の天下同様、平家の天下より悪いかも知れぬ。何故と云えば俊寛は、浄海

入道いんどう

より物わかりが好い。物わかりが好ければ政治なぞには、夢中になれぬ筈ではな

いか？

理非曲直りひきよくちよくも弁えずに、

途方とほうもない夢ばかり見続けている、――

――そこが高平たかへい

太だの強い所じや。

小松こまつの内府ないふなぞは利巧なだけに、

天下を料理するとなれば、浄海入道

より数段下じや。内府も始終病身じやと云うが、平家一門のために計れば、一日も早く死

んだが好い。その上またおれにしても、

食色じきしきの二性を離れぬ事は、浄海入道と似たよう

なものじや。そう云う凡夫ぼんぷの取った天下は、やはり衆生しゅじょうのためにはならぬ。所詮しよせん

人界いがいが浄土になるには、御仏みほとけの御天下おんてんかを待つほかはあるまい。――おれはそう思っ

ていたから、天下を計る心なぞは、微塵みじんも貯えてはいなかった。」

「しかしあの頃は毎夜のように、

中御門高倉なかみかどたかくらの大納言様だいなごんさまへ、

御通いなすったではあり

ませんか？」

わたしは御不用意を責めるように、俊寛様の御顔を眺めました、ほんとうに当時の御主

人は、北きたの方かたの御心配も御存知ないのか、夜は京極きょうごくの御屋形おやかたにも、滅多めつたに御休みでは

なかったのです。しかし御主人は不相変あいかわらず、澄ました御顔をなすったまま、芭蕉扇ばしやうせんを使

つていらつしやいました。

「そこが凡夫の浅ましきじや。ちようどあの頃あの屋形には、鶴つるの前まえと云う上童うえわらわがあ

つた。これがいかなる天魔の化身か、おれを捉えて離さぬのじや。おれの一生の不仕合わせは、皆あの女がいたばかりに、降つて湧いたと云うても好い。女房に横面を打たれたのも、鹿ヶ谷の山荘を仮したのも、しまいにこの島へ流されたのも、——しかし有王、喜んでくれい。おれは鶴の前に夢中になつても、謀叛の宗人にはならなかつた。女人に愛樂を生じたためしは、古今の聖者にも稀ではない。大幻術の摩登伽女には、阿難尊者さえ迷わせられた。竜樹菩薩も在俗の時には、王宮の美人を偷むために、隱形の術を修せられたそうじや。しかし謀叛人になつた聖者は、天竺震旦本朝を問わず、ただの一人もあつた事は聞かぬ。これは聞かぬのも不思議はない。女人に愛樂を生ずるのは、五根の欲を放つだけの事じや。が、謀叛を企てるには、貪嗔癡の三毒を具えねばならぬ。聖者は五欲を放たれても、三毒の害は受けられぬのじや。して見ればおれの知慧の光も、五欲のために曇つたと云え、消えはしなかつたと云わねばなるまい。——が、それはともかくも、おれはこの島へ渡つた当座、毎日忌々しい思いをしていた。」

「それはさぞかし御難儀だつたでしょう。御食事は勿論、御召し物さえ、御不自由勝ちに違いありませんから。」

「いや、衣食は春秋二度ずつ、肥前の国鹿瀬の莊から、少将のもとへ送つて来た。鹿瀬

の莊は少將の舅、平の教盛の所領の地じや。その上おれは一年ほどたつと、この島の風土にも慣れてしまった。が、忌々しさを忘れるには、一しよに流された相手が悪い。丹波の少將成経などは、ふさいでいなければ居睡りをしていた。」

「成経様は御年若でもあり、父君の御不運を御思いになつては、御歎きなさるのもごもつとものです。」

「何、少將はおれと同様、天下はどうなつてもかまわぬ男じや。あの男は琵琶でも掻き鳴らしたり、桜の花でも眺めたり、上臈に恋歌でもつけていれば、それが極楽じやと思つてゐる。じやからおれに会いさえすれば、謀叛人の父ばかり怨んでゐた。」

「しかし康頼様は僧都の御房と、御親しいように伺いましたが。」

「ところがこれが難物なのじや。康頼は何でも願さえかければ、天神地神諸仏菩薩、ことごとくあの男の云うなり次第に、利益を垂れると思つてゐる。つまり康頼の考えでは、神仏も商人と同じなのじや。ただ神仏は商人のように、金銭では冥護を御売りにならぬじやから祭文を読む。香火を供える。この後の山なぞには、姿の好い松が沢山あつたが、皆康頼に伐られてしもうた。伐つて何にするかと思えば、千本の卒塔婆を拵えた上、一々それに歌を書いては、海の中へ抛りこむのじや。おれはまだ康頼くらい、現金な男は見た

事がない。」

「それでも莫迦ばかにはなりません。都の噂ではその卒塔婆が、熊野くまのにも一本、巖いつくしま島にも一本、流れ寄つたとか申していました。」

「千本の中には一本や二本、日本の土地へも着きそうなものじや。ほんとうに冥護みょうごを信ずるならば、たつた一本流すが好いよ。その上康頼は難有ありがたそうに、千本の卒塔婆そとばを流す時でも、始終風向きを考えていたぞ。いつかおれはあの男が、海へ卒塔婆を流す時に、帰命頂うちようらいくまのさんしよ礼熊野三所の権現ごんげん、分けては日吉山王ひよしさんおう、王子おうじの眷属けんぞく、総じては上は梵天かみ ぼんてん帝釈たいしゃく、下は堅牢地神けんろうじしん、殊には内海ないかい外海げかい竜神りゆうじん八部はちぶ、庇護おうごの毗まなじりを垂れさせ給えと唱となえたから、その跡あとへ並びに西風大明神にしかぜだいみようじん、黒潮権現くろしおごんげんも守らせ給え、謹上再きんじようさい拜はいとつけてやつた。」

「悪い御冗談ごじようだんをなさいます。」

わたしもさすがに笑い出しました。

「すると康頼やすよりは怒おこつたぞ。ああ云う大嗔恚だいしんいを起すようでは、現世利益げんぜりやくはともかくも、後生ごしょう往生おうじようは覺束おぼつかないものじや。——が、その内に困まつた事には、少将しょうしょうもいつか康頼やすよりと一しよに、神信心しんしんを始めたではないか？ それも熊野くまのとか王子おうじとか、由緒ゆいしよのある神

を拝むのではない。この島の火山には鎮護ちんごのためか、岩殿いわどのと云う祠ほこちがある。その岩殿へ詣でるのじゃ。——火山と云えば思い出したが、お前はまだ火山を見た事はあるまい？」

「はい、たださつき榕樹あけこうの梢こずえに、薄赤い煙のたなびいた、禿はげ山の姿を眺めただけです。」

「では明日あすでもおれと一しよに、頂へ登って見るが好よい。頂へ行けばこの島ばかりか、大海の景色は手にとるようじゃ。岩殿の祠も途中にある、——その岩殿へ詣でるのに、康頼はおれにも行けと云うたが、おれは容易よういには行こうとは云わぬ。」

「都そうずでは僧都ごぼうの御房一人、そう云う神詣でもなさらないために、御残されになったと申して居ります。」

「いや、それはそうかも知れぬ。」

俊寛様は真面目まじめそうに、ちよいと御首を御振りになりました。

「もし岩殿に霊たまがあれば、俊寛一人を残したまま、二人の都返りを取り持つくらいは、何とも思わぬ禍津神まがつがみじゃ。お前はさつきおれが教えた、少将の女房を覚えているか？あの女もやはり岩殿へ、少将がこの島を去らぬように、毎日毎夜詣でたものじゃ。所がその願がは少しも通らぬ。すると岩殿と云う神は、天魔にも増した横道者おうどうものじゃ。天魔には世せ尊御出世ごしゅつせいの時から、諸悪を行うと云う戒かいぎ行がある。もし岩殿の神の代りに、天魔が

あの祠にいとすれば、少将は都へ帰る途中、船から落ちるか、熱病になるか、とにかくに死んだのに相違ない。これが少将もあの女も、同時に破滅させる唯一の途^{みち}じや。が、岩殿は人間のように、諸善ばかりも行わねば、諸悪ばかりも行わぬらしい。もつともこれは岩殿には限らぬ。奥州名取郡笠島の道祖^{さえ}は、都の加茂河原^{かもがわら}の西、一条の北^{ほとり}の辺に住ませられる、出雲路^{いずもじ}の道祖^{さえ}の御娘^{おんむすめ}じや。が、この神は父の神が、まだ賀^{むこ}の神も探されぬ内に、若い都の商^{あきゆうど}人と妹背^{いもせ}の契^{ちぎり}を結んだ上、さつさと奥へ落ちて来られた。こうなつては凡夫も同じではないか？ あの実方^{さねかた}の中将は、この神の前を通られる時、下馬^{げば}も^{はい}拝もされなかつたばかりに、とうとう蹴殺^{けころ}されておしまいなすつた。こう云う人間に近い神は、五塵を離れていぬのじやから、何を仕出かすか油断はならぬ。このためしでもわかる通り、一体神と云うものは、人間離れをせぬ限り、崇^{あが}めると云えた義理ではない。――が、そんな事は話の枝葉^{えだは}じや。康頼^{やすより}と少将とは一心に、岩殿詣でを続け出した。それも岩殿^{くまの}を熊野になぞらえ、あの浦は和歌浦、この坂は蕪^{かぶらざか}坂なぞと、一々名をつけてやるのじやから、まず童^{わらべ}たちが鹿狩^{しかがり}と云つては、小犬を追いまわすのも同じ事じや。ただ音^{おとなし}無^{たき}の滝^{たき}だけは本物よりもずっと大きかった。」

「それでも都の噂^{きずい}では、奇瑞^{きずい}があつたとか申しています。」

「その奇瑞の一つはこうじや。結願けちがんの当日岩殿の前に、二人が法施ほっせを手向たむけていると、山風が木々を煽あおった拍子ひょうしに、椿つばきの葉が二枚こぼれて来た。その椿の葉には二枚とも、虫の食った跡あとが残あっている。それが一つには帰雁きがんとあり、一つには二とあつたそうじや。合せて読めば帰雁二となる、——こんな事が嬉しいのか、康頼は翌日得々とくとくと、おれにもその葉を見せなぞした。成程二とは読めぬでもない。が、帰雁きがんはいかにも無理じや。おれは余り可笑おかしかつたから、次の日山へ行つた歸りに、椿の葉を何枚も拾つて来てやつた。その葉の虫食いを續けて読めば、帰雁二どころの騒さわぎではない。『明日歸洛みょうにちきらく』と云うのもある。『清盛横死きよもりおうし』と云うのもある。『康頼往生かうらいおうじよう』と云うのもある。おれはさぞかし康頼も、喜ぶじやろうと思うたが、——」

「それは御立腹なすつたでしよう。」

「康頼は怒るのに妙を得ている。舞まいも洛中に並びないが、腹を立てるのは一段と巧者じや。あの男は謀叛むはんなぞに加わつたのも、嘔患ひんいに牽ひかれたのに相違ない。その嘔患ひんいの源みなもとはと云えば、やはり増長慢ぞうじょうまんのなせる業わざじや。平家は高平太たかへいだ以下皆悪人、こちらは太納言だいなごん以下皆善人、——康頼はこう思っている。そのうぬ惚ぼれがためにならぬ。またさつきも云うた通り、我々凡夫は誰も彼も、皆高平太と同様なのじや。が、康頼の腹を立てるのが好よい

か、少将のため息をするのが好いか、どちらが好いかはおれにもわからぬ。」

「成なりつね経様御一人だけは、御妻子もあつたそうですから、御まぎ紛れになる事もありましたらうに。」

「ところが始終蒼い顔をしては、つまらぬ愚痴ぐちばかりこぼしていた。たとえば谷間の椿を見ると、この島には桜も咲かないと云う。火山の頂の煙を見ると、この島には青い山もないと云う。何でもそこにある物は云わずに、ない物だけ並べ立てているのじゃ。一度なぞはおれと一しよに、磯山いそやまへ橐吾つわを摘つみに行ったら、ああ、わたしはどうすれば好よいのか、ここには加茂川かみがわの流れもないと云うた。おれがあの時吹き出さなかったのは、我立そまつ杣そまの地主じしゅごんげん権現ひよし、日吉ひよしの御冥護ごみょうごに違ちがいがない。が、おれは莫迦ばか莫迦ばかしかつたから、ここには福ふくはらひとや原へいの獄ごくもない、平相へいしょう国入こくにゅう道どう浄海じょうかいもない、難ありがた有がたい難有がたいところ云うた。」

「そんな事をおっしゃつては、いくら少将でも御腹立ちになりましたらう。」

「いや、怒おこられれば本望じゃ。が、少将はおれの顔を見ると、悲しそうに首を振りながら、あなたには何もおわかりにならない、あなたは仕合せな方かたですと云うた。ああ云う返答は、怒られるよりも難儀じゃ。おれは、——実はおれもその時だけは、妙に気が沈んでしまう。もし少将の云うように、何もわからぬおれじやったら、気も沈まずにすんだかも知れ

ぬ。しかしおれにはわかつているのじや。おれも一時は少将のように、眼の中の涙を誇つたことがある。その涙に透かして見れば、あの死んだ女房も、どのくらい美しい女に見えたか、——おれはそんな事を考えると、急に少将が気の毒になった。が、気の毒になつて見ても、可笑しいものは可笑しいではないか？　そこでおれは笑いながら、言葉だけは真面目に慰めようとした。おれが少将に怒られたのは、跡にも先にもあの時だけじや。少将はおれが慰めてやると、急に恐しい顔をしながら、嘘をおつきなさい。わたしはあなたに慰められるよりも、笑われる方が本望ですと云うた。その途端に、——妙ではないか？　とうとうおれは吹き出してしもうた。」

「少将はどうなさいました？」

「四五日の間はおれに遇うても、挨拶さえ碌にしなかった。が、その後また遇うたら、悲しそうに首を振つては、ああ、都へ返りたい、ここには牛車も通らないと云うた。あの男こそおれより仕合せものじや。——が、少将や康頼でも、やはり居らぬよりは、いた方が好い。二人に都へ歸られた当座、おれはまた二年ぶりに、毎日寂しゆうてならなかつた。」

「都の噂では御寂しいどころか、御歎き死にもなさり兼ねない、御容子だったとか申して

いました。」

わたしは出来るだけ細々と、その御噂を御話しました。琵琶法師の語る言葉を借りれば、

「天に仰ぎ地に俯し、悲しみ給えどかいぞなき。……猶も船の纜に取りつき、腰になり脇になり、丈の及ぶほどは、引かれておわしけるが、丈も及ばぬほどにもなりしかば、また空しき渚に泳ぎ返り、……是具して行けや、我乗せて行けやとて、おめき叫び給えども、漕ぎ行く船のならいにて、跡は白浪ばかりなり。」と云う、御狂乱の一段を御話したのです。俊寛様は御珍しそうに、その話を聞いていらつしやいましたが、まだ船の見える間は、手招ぎをなすつていらつたと云う、今では名高い御話をする、と、

「それは満更嘘ではない。何度もおれは手招ぎをした。」と、素直に御領きなさいました。

「では都の噂通り、あの松浦の佐用姫のように、御別れを御惜しみなすつたのですか？」

「二年の間同じ島に、話し合うた友だちと別れるのじや。別れを惜しむのは当然ではないか？　しかし何度も手招ぎをしたのは、別れを惜しんだばかりではない。——一体あの時おれの所へ、船のはいつたのを知らせたのは、この島にいる琉球人じや。それが浜

べから飛んで来ると、息も切れ切れに船々と云う。船はまずわかったものの、何の船がは
 いて来たのか、そのほかの言葉はさっぱりわからぬ。あれはあの男もうろたえた余り、
 日本語と琉球語とを交る交る、饒舌つていたのに違いあるまい。おれはともかくも船と云
 うから、早速浜べへ出かけて見た。すると浜べにはいつのまにか、土人が大勢集つてい
 る。その上に高い帆柱のあるのが、云うまでもない迎いの船じゃ。おれもその船を見た
 時には、さすがに心が躍るような気がした。少将や康頼はおれより先に、もう船の側へ
 駆けつけていたが、この喜びようも一通りではない。現にあの琉球人なぞは、二人とも毒
 蛇に噛まれた揚句、気が狂ったのかと思うくらいじゃ。その内に六波羅から使に立つ
 た、丹左衛門尉基安は、少将に赦免の教書を渡した。が、少将の読むのを聞けば、
 おれの名前がはいっていない。おれだけは赦免にならぬのじゃ。——そう思つたおれの心
 の中には、わずか一弾指の間じやが、いろいろの事が浮んで来た。姫や若の顔、女
 房の罵る声、京極の屋形の庭の景色、天竺の早利即利兄弟、震旦の一行阿
 闍梨、本朝の実方の朝臣、——とても一々数えてはいられぬ。ただ今でも可笑しいの
 は、その中にふと車を引いた、赤牛の尻が見えた事じゃ。しかしおれは一心に、騒がぬ
 容子をつくつていた。勿論少将や康頼は、気の毒そうにおれを慰めたり、俊寛も一しよに

乗せてくれいと、使にも頼んだりしていたようじゃ。が、赦免の下らぬものは、何をどうしても、船へは乗れぬ。おれは不動心を振り起しながら、何故おれ一人赦免に洩れたか、その訳をいろいろ考えて見た。高平太はおれを憎んでいる。——それも確かには違いな
い。しかし高平太は憎むばかりか、内心おれを恐れている。おれは前の法勝寺の執
行じゃ。兵仗の道は知る筈がない。が、天下は思いのほか、おれの議論に応ずるか
も知れぬ。——高平太はそこを恐れているのじゃ。おれはこう考えたら、苦笑せずには
いられなかつた。山門や源氏の侍どもに、都合の好い議論を拵えるのは、西光法師など
の嵌り役じゃ。おれは眇たる一平家に、心を勞するほど老耄れはせぬ。さつきもお前に云
うた通り、天下は誰でも取っているが好い。おれは一卷の経文のほか、鶴の前でも
いれば安堵している。しかし浄海入道になると、浅学短才の悲しさに、俊寛も無氣
味に思っているのじゃ。して見れば首でも刎ねられる代りに、この島に一人残されるのは、
まだ仕合せの内かも知れぬ。——そんな事を思っている間に、いよいよ船出と云う時にな
つた。すると少将の妻になつた女が、あの赤児を抱いたまま、どうかその船に乗せてくれ
いと云う。おれは氣の毒に思つたから、女は咎めるにも及ぶまいと、使の基安に頼んで
やつた。が、基安は取り合いもせぬ。あの男は勿論役目のほかは、何一つ知らぬ木偶の坊

じゃ。おれもあの男は咎めずとも好い。ただ罪の深いのは少将じゃ。――」

俊寛様は御腹立たしそうに、ばたばた芭蕉扇ばしやうせんを御使いなさいました。

「あの女は氣違いのように、何でも船へ乗ろうとする。舟子ふなごたちはそれを乗せまいとする。とうとうしまいにあの女は、少将の直垂ひたれの裾すそを掴つかんだ。すると少将は蒼い顔あおをしたまま、邪慳じゃけんにその手を刎はねのけたではないか？ 女は浜べに倒れたが、それぎり二度と乗ろうともせぬ。ただおいおい泣くばかりじゃ。おれはあの一瞬間、康頼やすよりにも負けぬ大嗔恚だいしんいを起した。少将は人畜生じんちくしょうじゃ。康頼もそれを見ているのは、仏弟子ぶつでしの所業しよぎようとも思われぬ。おまけにあの女を乗せる事は、おれのほかに誰も頼まなかった。――おれはそう思うたら、今でも不思議な氣がするくらい、ありとあらゆる罵詈譁ばりざんぼうが、口を衝ついて溢あふれて来た。もつともおれの使ったのは、京童きやうわらべの云う悪口あくこうではない。八万法蔵はちまんほうぞう十にぶきようちゆう あつきらせつ

二部經中の悪鬼羅刹あくきらせつの名前ばかり、矢つぎ早に浴びせたのじゃ。が、船は見る見る遠ざかつてしまう。あの女はやはり泣き伏したままじゃ。おれは浜べにじだんだを踏ふみながら、返せ返せと手招ぎをした。」

御主人の御腹立ちにも関かわらず、わたしは御話を伺っている内に、自然とほほ笑えんでしまいました。すると御主人も御笑いになりながら、

「その手招ぎが伝わっているのじや。嗔恚たたいの祟りおこはそこにもある。あの時おれが怒りさえせねば、俊寛は都へ歸りたさに、狂いまわつたなぞと云う事も、口の端くちへ上はらずにすんだかも知れぬ。」と、仕方がなさそうにおつしやるのです。

「しかしその後は格別のちかくべつに、御歎なげきなさる事はなかつたのですか？」

「歎なげいても仕方はないではないか？ その上うへ時のたつ内には、寂しさも次第に消えて行つた。おれは今では己身こしんの中に、本仏ほんぶつを見るより望みはない。自土即淨土じどそくじようどと觀じさえすれば、大歡喜だいかんぎの笑い声も、火山から炎の迸ほとるように、自然と湧わいて来なければならぬ。

おれはどこまでも自力じりきの信者じや。——おお、まだ一つ忘れていた。あの女は泣き伏ふしたぎり、いつまでたつても動こうとせぬ。その内に土人も散じてしまふ。船は青空に紛まぎれるばかりじや。おれは余りのいじらしさに、慰めてやりたいと思うたから、そつと後手うしろでに抱だき起だそうとした。するとあの女はどうしたと思う？ いきなりおれをはり倒したのじや。

おれは目が眩くららみながら、仰向あおむけにそこへ倒れてしもうた。おれの肉身に宿らせ給う、諸しよぶつしよばやつしよみようおう

仏諸菩薩 諸明王も、あれには驚かれたに相違ない。しかしやつと起き上つて見る

と、あの女はもう村の方へ、すすろ歩いて行く所じやつた。何、おれをはり倒した訳か？ それはあの女に聞いたが好よい。が、事によると人ひと気はなし、凌りようぜられるとも思つた

かも知れぬ。」

五

わたしは御主人とその翌日、この島の火山へ登りました。それから一月ほど御側にいた後、御名残り惜しい思いをしながら、もう一度都へ歸つて来ました。「見せばやなわれを思わむ友もがな磯のとまやの柴の庵を」——これが御形見に頂いた歌です。俊寛様はやはり今でも、あの離れ島の笹葺きの家に、相不変御一人悠々と、御暮らしになつてゐる事でしょう。事によると今夜あたりは、琉球芋を召し上りながら、御仏の事や天下の事を御考へになつてゐるかも知れません。そう云う御話はこのほかにも、まだいろいろ伺つてあるのですが、それはまたいつか申し上げましょう。

（大正十年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「中央公論」

1922（大正11）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2012年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

俊寛

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>